「土偶坊」考

原　子　朗

1

井伏鱒二の小説「黒い雨」は、主人公閑間重松（しずましげまつ）の手記のかたちで、物語が展開してゆく。重松はその『被爆日記』のなかに、戦時下における閑間一家の「貧相この上もない食生活」を附加えておこうと思い立ち、妻のシゲ子に不馴れな記録仕事を押しつける。シゲ子は「広島にて戦時下に於ける食生活」と題する手記を書くわけだが、その中で「隣組の宮地さんの奥さんが其筋に呼出されてお叱りを受け」たことが書きとめられる。宮地さんの奥さんは食糧の買出しに行く電車の中で、隣席の人に「このごろ配給米が三合になったので、うちの子供の教科書のなかにある言葉が改悪されました」と話しかける。教科書の詩の文句が「一日ニ玄米四合ト……」となっていたのを、米の配給量と睨み合わして「一日ニ玄米三合ト……」と改訂されたことをいい、「一日に四合というのを、三合と書きかえるのは、曲学阿世の徒のすることです。子供がこの事実を知ったら、どういうことになりますか。おそらく、学校で教わる日本歴史も信じなくなるでしょう。もし宮沢賢治が生きかえって、自分で書きなおしたとすれば話はまた別ですが」といったというのである。

「其筋の人」はこの買出しの奥さんに向って、流言蜚語をしたといって咎め、闇買いをする人間が、いやしくも教科書の内容に口出しする資格はない……といって叱りつけた、とあるわけだが、こういうところにも井伏作品一流の、とぼけたユーモアと諷刺があって、しかもなまなかのリアリズム小説が描ききれない当時の時代相が活写される。なお、詩句の出てくる「雨ニモマケズ」は、「宮沢賢治という詩人の代表的な作品で、農民の耐乏生活をよく理解した修道的な美しさの光っている絶唱であったということです。」としるされている。

「玄米四合」が「玄米三合」に改竄されて、この「雨ニモマケズ」が戦時体制に利用されたことは周知の事実である。ところが、戦時

中当局の意図にむかえられて、それほど利用されたものであれば、戦後はまったく顧みられるはずもないのに、この「雨ニモマケズ」にかぎって、小倉豊文氏も指摘するように(1)、敗戦後最初に発行された文部省編纂の、民主主義にのっとる中学一年の国語教科書にも採録されている。その後、今日にいたるまで、この〈作品〉が多くの教科書に、おそらく最高に近い頻度で採り上げられていることも、周知の事実である。そうして一般には、これが「宮沢賢治という詩人の代表的な作品」で、「絶唱」というふうに考えられているようである。

有名になれば俗悪化もまぬかれないもので、商品の広告にもその詩句がよく用いられたりするのも、その一例であろう。最近の情報によれば、四国方面で作られる障子紙が、この詩句を宣伝文句に用いたため、売行きを増したという。レインコートや障子紙に「雨ニモマケズ風ニモマケズ」は、けだし言い得て妙のようである。

こうした詩句が「スローガンのように流行することは、この詩句の観念的な欠陥に因っているので、この詩句がすぐれているためではない。」といった中村稔氏のきめつけ(2)に同調するむきも多いが、これは余計ないいがかりで、俗悪化され、商品化され、スローガンのように流行することと、もともとの詩や作品の価値とは無関係である。文字作品の詩句や章句がすぐれていようがいまいが、流行するものは、流行の要因によって流行する。流行の価値と作品の価値には、本質的に断絶があることを知るべきである。

また、「黒い雨」中の挿話のように、「玄米四合」が「玄米三合」に、勝手に改竄されたことも、ずいぶん問題になったことである。文部官僚の手によって、それがなされたということで、よけい目くじら立てるむきもあった。しかし文部省であれ、民間であれ、原作を勝手に（一字一句であれ、仮名遣いであれ）直すということじたい、たしかに許されることではない。ところが、そのことを憤慨するあまり、玄米だから一日四合でも、どうにかもつので、白米なら一日五合でも仕事はできないのだ（つまり玄米食は搗米より腹もちがよいとされたので）……とか、いや玄米四合でも、「味噌ト少シノ野菜ヲタベ」るだけでは、絶対に体がもつはずがない。それなのに一日三合とはなにごとか……といった論議までおこなわれたこともある。今考えれば滑稽なくらいだが、こうした悲壮な論議にいたっては、もはや、これまた作品の価値とは別の次元に立っているといわなければならない。これも有名な若山牧水の「しらたまの歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり」の歌を取上げて、牧水は虫（齲）歯だったと解析した、名解釈のあったことを思い出させる。

私は原作者以外の者の手によって、作品が改められることを認めるものではないが、この賢治の「雨ニモマケズ」は、たとえ「四合」が「三合」であったとしても、作品じたいの価値は、それほどかわるものではないと、考えるのである。あえていうなら「一日ニ玄米二合」でも、「一日ニ玄米五合」でもかまわない。原作が音読して「玄米シ・ゴ・ウであるから、玄米「サン・ゴ・ウ」よりも「玄米ニ・ゴ・ウ」か、「玄米ゴ・ゴ・ウ」のほうが、音感のうえからは好ましいにちがいない

が、要するに、一日に何合で生きられるかという合理的解釈の彼方に、この〈作品〉の意図がある。そのことを強調したいために、あえて私はこういうのである。

では、合理的解釈をこえた〈作品〉の意図とは、いかなるものであるか。――私はようやく本稿の主題にはいるところに来たようである。この「雨ニモマケズ」の作柄からも、私がなにか唯美的な、新解釈を試みようとしているのでないことは、断わるまでもあるまい。また、ここ十年来「雨ニモマケズ論争」で知られる中村稔、谷川徹三両氏の解釈をはじめ、これらに付随して示された多くの見解を、根底からくつがえすほどの、きわ立った解釈を私が用意しているわけでもない。それら多くの諸家の意見に、その折々に一応は目を通して来た私としては、それらをふまえたうえで、ここらで私なりの解釈を示しておきたい、とそう思うまでである。

2

本論にはいる前に、やはりこの詩についての基礎的な必要事項の確認をしておきたい。そして、この詩がいかに受取られてきたか、つまり、「雨ニモマケズ論争」を軸とする多くの意見についても、やはり概略ふれておく必要があるかと思う。

周知のように、「雨ニモマケズ」は賢治没後発見された生前愛用の手帳、全部で十一冊の中の、内容的にも最も充実し、最も重要な一冊に、メモふうにつづられている〈作品〉である。この手帳については、小倉豊文氏の精細な研究『宮沢賢治の手帳研究』(昭27、創元社刊)がある。なお、最近、原寸・原色・原型で、この手帳の復原版(生活文化社刊)が出た。実に見事な技術で、原物かと見紛うほどの出来である。また、これに付せられた別冊「宮沢賢治『手帳』解説」によって、小倉氏は前著の補遺、ないし改訂をおこなっている。これの内容についてはまた後にふれるが、「最後の手帳」と呼ぶにふさわしい(時期的には心ずしも最後ではないので)、「雨ニモマケズ」所載の手帳と、他の手帳との区分が明らかにされている(同解説「序説」)ことをここでは紹介しておく。既刊全集ではこの区別が不明であった。

さて、この「雨ニモマケズ」であるが、こんどの復原版でも明瞭なように、他のメモの部分とくらべてみても、訂正がきわめて少ない。一気に書きつけていった、やはりメモの域を出ないものである。賢治の多くの詩作品はこうして先ず手帳に書きつけられることによって、「永久の未完成これ完成である」(農民芸術論綱要)ところの推敲がはじまっていったわけである。しかし、一気に書きつけていった、いわば初稿だからといって、作品価値を割引くことはできない。書き込みや訂正がきわめて少ないからといって、ナマな作品ということもできない。だからこのことは内容的価値とは別にして――「雨ニモマケズ」は、それにしても作品と呼ぶには、あまりに未定稿にすぎる――ということはいえるであろう。私が本稿でもこれを括孤つきで〈作品〉と呼んでいるのも、つい、そのことにこだわってのことである。

一行目の詩句、すなわち「雨ニモマケズ」を題にして、私たちが

呼びならわしているのは、便宜的なことで、この〈作品〉に題がないためである。「ヒドリノトキハ／ナミダヲナガシ」のヒドリが、ヒデリの誤記であることは、次行の「サムサノナツハ／オロオロアルキ」に照らして、そう断じてよいことは明らかだが、あと、細かな表記上のミスをここで指摘しておくと、「アラユルコトヲシブンヲカンジョウニ入レズニ」のカンジョウ（勘定）は、正しくは旧記でカンヂャウである。普通なら漢字にするところを、作者は作者の内なる読者にむかって仮名書き、それも片仮名書きにせずにはおれなかったために（このことは後にふれる）、つい間違えたこうした表記上のミスこそ、中村稔氏のいう「賢治がふと書きおとした過失」（氏はこの詩そのものをこういうのだが）かもしれない。もしこれを、後にさらに推敲し、作品化していったならば、賢治はちゃんと題もつけ、誤記も訂正していたであろう。だが、病床にあってついにその機を失したともいえるし、あるいはこの〈作品〉に関するかぎり、賢治にはその必要がなかったともいえる。私は後者をとるものであるが、このことも本稿の主題にかかわる問題なので、ここではいわない。

今私にとって必要な確認事項はこれくれらいにして、あとはそのつど、論の途中でふれてゆくことにしたい。なお読者には小倉豊文氏の前記二書と、復原版の手帳そのものを参照されることをおすすめしておきたい。以下でいうように、「雨ニモマケズ」はこれだけを切離して、一つの作品として単独に論じるのでは、いつまでも焦点は定まらず、論は恣意的に拡散してゆくと思われるからである。先ず、これを「手帳」という具体のなかに位置づけ、さらに「手帳」を賢治の作品行動ぜんたいのなかに位置づけてかかる必要がある。

さて、「雨ニモマケズ論争」を軸とする多くの意見について、確認の意味で概略ふれておくことにする。実は私は別の機会に、これも簡潔にではあるが、その展望を試みたことがある(3)。したがって、ここでは本稿の展開に必要なものだけにとどめ、かつ前者を敷衍するかたちになることを、断わっておきたい。

ほぼ十年前の谷川、中村両氏の論争については、まだ記憶しておられるむきも多かろうと思うが、中村稔氏は自著『宮沢賢治』（昭30、ユリイカ新書、→昭33、五月書房刊、同名書、→昭38、七曜社刊『定本・宮沢賢治』）の中で（「雨ニモマケズ」について）、「『雨ニモマケズ』は僕にとって、宮沢賢治のあらゆる著作の中でもっとも、とるにたらぬ作品のひとつであろう思われる。」といい、古めかしい技法（対偶表現が多く使われていることをさす）にささえられたこの詩は、「詩人の魂がその振幅をしめしていないと同様に、この作品に欠けているものは、精神のわかわかしいはたらきである。」ときめつけ、「こういう意味で、『雨ニモマケズ』は羅須地人協会からの全面的退却であり、『農民芸術概論』の理想主義の完全な敗北である。そしてこの作品は賢治がふと書きおとした過失のように思われる。」と、先ずは全面的否定をおこなったのである。

ことに最後の四行「ホメラレモセズ／クニモサレズ／サウイフモノニ／ワタシハナリタイ」の詩句から、「賢治の敗北感を感じとることができないとすれば、それは宮沢賢治にまつわる俗説にまどわさ

れて、いるからだ。」と、暗に、はやくからこの詩を明治以降の最高の詩として、ひときわ高く評価して来た谷川徹三氏いらいの宗教的、人道主義的解釈を攻撃した。

これに対して谷川氏は、論文「われはこれ塔建つるもの」(昭34、5月、中尊寺での賢治詩建立記念講演の筆録を雑誌「世界」昭38、1月号に転載、さらに昭38、法大出版部刊『宮沢賢治の世界』に収録)において、はげしく反駁した。

「中村稔君は賢治の生活と精神との変貌を跡づけて、一つの思想的固定点をつくり、その思想的固定点の上に立って、もっぱら頭で、頭でのみ、「雨ニモマケズ」を否定したのであり」、「その理論はそれとして一応明快であります。しかしそれは、元来割切れないものを手軽に割切ったところからきている明快なので、肝心なものを取り落している。だから少し立ち入っていくと、さっき私が指摘したような、評価の矛盾に陥るのであります。」といった調子である。「評価の矛盾」と氏が指摘するのは、中村氏が、「雨ニモマケズ」をきめつけたにもかかわらず、「だがそれにしても、この作品がある異常な感動をさそうものをもっていることは否定できない」といい、さらに対偶修辞をけなしながらも、ヒデリノトキハナミダヲナガシ／サムサノナツハオロオロアルキという「この作品のなかでもっとも個性的といわれる章句」(中村)を「これほど心をうたれる句はこの作品の中には他にないし、賢治の全作品をつうじてもすくない」といったことを指している。

なお、中村氏が賢治のわかわかしい精神の欠落の証拠としてあげるこの詩の対偶表現にしても、谷川氏は逆にこれを高く認め、経典や叙事詩の修辞法に近く、「その発想が近代個人主義文字を超えているように、その措辞も近代個人主義文字を超えている」という。そして、これを「敗北の詩」と見るのは、「賢治の主体像を正しくとらえていないから」であり、中村氏が、賢治の宗教的心情や実践を社会経済史的立場から割切ったものとして、全面的に否定するのである。

この論争に対して、まわりから中島健蔵(朝日)、中村光夫(東京)、小倉豊文(中国)等々の諸氏が、各新聞紙上で発言を試みたが、中でも「賢治の極限と限界」(4)と題する中島氏のそれは、率直で興味ぶかいものがあった。「両方ともに賢治を高く評価しているのだが、病床の作である『雨ニモマケズ』を『賢治がふと書き落した過失のように思われる』という中村稔のことばをまともに受けとめるとすれば、とんでもない思い上がりであって、なるほど谷川徹三が怒った通り、『肝心なものを取り落している』というのに賛成する。」といい、また「谷川徹三の意見の中にも、ひいきの引き倒しがある」として、「一ばん大切なことは、賢治の文学の全体の中で、この詩は、彼が死を前にした病床の中で書いたものだ、という事実をよく理解することである。これがギリギリの悲願であることはたしかである。同時にこれが賢治の極限でもあるが、限界でもあるというのがわたくしの考えである。」といっている。

国文学者のあいだでも、この論争に触発されて書かれた、穏健ないくつかの論文があったが、論争の構造を分析した恩田逸夫氏の

『雨ニモマケズ』論争の構造」（「近代文学懇談会報22号）や、佐藤泰正氏の「宮沢賢治―その側面―」（「梅光女学院短大紀要」1）が目立った。佐藤氏は「健康の一時的な恢復と共に、ひそかに夢みられ、希求された、己が新生への深い祈りこそ、この詩稿の真のモチーフ」と規定している。

また、雑誌「文学」の32巻・3号（昭39）が行なった賢治特集の五つの論文のうち、主として童話を取上げた寺田透氏のもの（宮沢賢治の童話の世界）と、資料的な補遺と紹介が主である小倉豊文氏のもの（「手帳」その他）をのぞく残りの三点、すなわち、小田切秀雄「宮沢賢治の文学史的位置設定のために」、山本太郎「詩人・宮沢賢治」、山室静「宮沢賢治の魔術的世界」は、いずれも中村・谷川論争にふれ、あるいはかなりのスペースをついやしている。

小田切氏の論文は、文学史の中に組込む視野を欠いていたこれまでの賢治研究に、好箇の指標をうちたてたものとして注目されるが、氏は中村・谷川論争については、「雨ニモマケズ」が軍国主義に利用されたのは、賢治自身の弱点に由来するという点で中村説をみとめ、「それにもかかわらずこの詩が美しいということに関しては、谷川徹三の指摘の方にぶがある。」といっている。

山本氏は、まるごと中村説をみとめる。そして「僕が『雨ニモマケズ』を評価しえないのは、この説教臭の為である。」といっている。

この三者のうちで、最も論争に多くふれた山室氏の論文は、謙虚な、ふかぶかとした批評だけがもちうる、強い説得力を感じさせる。山室氏は、ともかくも、賢治という「とかく伝説化されてきたこの聖者的人物が、ぐっと人間化され」たという点で、中村氏の「挫折」説を評価するが、「しかし、それにしても依然全体としての賢治像は、私の中でさして変容を受けない」といい、この詩が、たとえ「挫折」であり「過失」であろうと、「この詩をふくむ全体において、その生涯と「全作品は、依然として稀有な全一と純粋を示して、私を打つことを止めない」といっている。そして、中村説は「谷川氏のいうように彼の農民の友としての面を社会思想史の立場から見たものにすぎない」もので、「これを『挫折』とし、失敗とみるのは、あまりにも実生活の上での成否に捉われた見方」であり、結論的には、これは「中村氏のいうような、ぷと書き落とした『過失』では決してなく、やはり宮沢賢治という人間の生涯を象徴するに足りる作品」であると述べている。

以上、私見をまじえず、ほぼ十年間の論議の主なものを、復習の意味で、思い出をたどるようにたどっているだけである。だから私自身には有益であっても、この間の事情にくわしい読者には今更めき、あるいはそれほどでもない読者には、紹介としても概略すぎて、いずれにもせよ迷惑であるかもしれない。

なお、このほか篠田一士氏の発言（「雨ニモマケズ」論争に――人生論的感傷を排す――「朝日ジャーナル」二〇四号、昭38、2、3）や、中村稔氏自身の反論（「雨ニニマケズ」再論、「文芸」昭38、4月号）、その他多くを列挙したいが、紙数の都合で省略し、以下で必要に応じては、これらを取上げることになろう。

そろそろ私見を加えつつ、本論にうつっていきたい。

3

比較的若い世代、といっても、おおむね賢治の詩を戦後になって読んだ詩人たちは、中村説を支持する傾向が強いことは否めないようである。この傾向の底流には、賢治自身への反撥というより、ひと口にいって戦前からの賢治の評価に対する、評価のあり方に対する反撥がはたらいていることは明らかである。そのことは、先ず誰よりも中村稔氏自身の立論と、この詩の批判にあらわれている。

羅須地人協会時代の賢治の活動を、その理想主義の、したがって詩的想像力の頂点として考えることの当否は、ここでは暫くおくとしても、中村氏の論断のバネになっているものは、なによりも「宮沢賢治にまつわる俗説」への、あるいは「俗説にまどわされている」一般の賢治観への、強い反撥である。

軍国主義に利用されたというよりも、この詩を軍国主義に利用させてしまった、そうした「俗説」からの詩の奪回という点で、私も中村説は高く評価されるべきだと思う。山室氏も指摘したように、それは聖者や伝説からの、人間賢治の解放といえるものであった。

だが、反俗のバネが利きすぎて、氏には「雨ニモマケズ」は「賢治のあらゆる著作の中でもっとも、とるにたらぬ作品」であり、「過失」にまでなってしまったのである。この勇み足的なくだりが、こんどは谷川氏の反論のバネになっていることは、見てきたとおりである。

中村氏が最初から、文字どおりにそうは思っていないことは、谷川氏の指摘する「矛盾」そのものがそうだし、詩誌「現代詩手帖」がおこなった特集「宮沢賢治再検討」（昭38、6月号）での座談会の内容でも明らかである。吉本隆明氏に「一個の作品として見たばあい、（「雨ニモマケズ」は）駄作ですか。ぼくはそうとうによくできた作品だと思うんですよ。」と具体的に指摘されて、中村氏は（字面だけで見ると）、「ううん……」とうなって、べつに反論もしていない。この詩をみとめるもみとめないも、「比較的な話」としてのことであるらしい。

それはさておき、賢治を伝説化し、仏の座にすえて讃仰する傾向は根づよいものがあって、今に後を絶たないが、いうなればそうした俗流と、賢治の文学とは別ものである。まるで無関係なのである。えてして詩人には純情で物ぐさの傾向があって、俗流がはびこると当の賢治まで敬遠するか、つい気短かに勇み足の言を弄することになる。中村稔氏が、かならずしもそうだとはいわないが、一般に詩人のあいだに、そうしたムードのあることはたしかだろう。

また、そうした俗流と、谷川徹三氏の所説を結びつけることも、谷川氏にとって迷惑、というより失礼というものであろう。そうした誤解もかなりあったようだが、虚心に谷川氏の賢治論を読めば明らかなことである。ただ、谷川氏は早くから（賢治が軍国主義に利用されている、まさにそのころから）、「賢者の文学」と呼び、この「国力の充実」や「大勇猛心」を説き、「神への道」を強調する「雨ニモマケズ」論（昭19、9、東京女子大で講演したものを『雨

ニモマケズ』（日本叢書四、昭20、6）に、さらに戦後、前記『宮沢賢治の世界』に再録）――全文の印象から、発想が時流にそったものであるという感はまぬがれない――のなかで、この詩がメモされた十一月三日という日付にまで、「大きな意味を認め」たりしたのである。念のため、十一月三日は明治節、明治生れの人にとっては忘れがたい天長節の「佳日」である。『宮沢賢治の世界』では、ここに著者の断わりがあって、「今はもうこうは思っていないが、当時はそう思っていたので……」とある。

やむをえなかったであろうと思われる当時の状況を割引きして、よく読めば、谷川氏の説には深い洞察と、なによりも賢治への愛着が脈うっていて、充分説得力をもっているにもかかわらず、たしかにこうした発言には、中島健蔵氏のいう「ひいきの引き倒し」的な要素が、すでにあったということができる。俗流俗説の震源と誤解される箇所が、随所にあるのである。先ずなによりも、「賢者の文学」とか、「聖者の文学」といった表現には、おおまかで、古風な、道徳的な臭味がつきまとう。戦後の世代は先ず感覚的に反撥するであろう。戦後世代ではなくても、この詩が十一月三日に書かれたことは偶然ではないという、最近の北川冬彦氏の否定的な意見もあるくらいである(5)。ちなみに、この十一月三日説については、私も小倉豊文氏に同じて、これをまったく偶然と、素直に考えたい(9)。

ともあれ、この論争や論争をめぐる批判の下地には、こうした一種の世代的な、感覚的反撥がかくされていることを、私は指摘しておきたい。だが、それにしても、私はこの論争にそれなりの意義をみとめるものである。「谷川・中村論争は、噛み合う点がなくて不毛である。」といった気みじかな意見もあるが（生野幸吉「宮沢賢治論争の外で」現代詩手帳、前記特集号）、「不毛」ということばを、そんなに軽率に使うべきではあるまい。それならあらゆる批評は不毛ということにもなろう。

この詩が「挫折」と「敗北」を示す「過失」的な〈作品〉であるか、あるいは「自己滅却」、「自己肯定」の謙虚な「円現」の詩であるか、という点では、噛み合わないかもしれない。それはたぶんに水かけ論におわる性質のものである。それに対して、ほかから、いや、これは「疾すでに治するに近し／警むらくは……」（同手帳10月29日付）とあるように、小康を得た賢治の新生への希求をつづったものだと、いってみても同様のことであろう。

ところが、論争の中心点と一般には思われている部分ではなく、他の付随的な部分で、意外に噛み合う面を、この論争はもっていたのである。たとえば、前にあげた修辞形式としての対偶表現の問題にしてもそうであり、なおかつ中村氏を感動させずにはおかない、この詩のはらむ「深淵」の所在、という点についてもそうである。ところが、これらの点については谷川、中村の両氏とも、それほど深く掘りさげていってはいない。また周囲も、肝腎のこれらの点について、深くつきあった形跡もないのである。これとて、けっきょくは、詩の認識の相違に帰せられる問題だから……というわけであろうか。どうやら私の考えでは、もし論争が不毛というなら、不毛にしているのは多寡をくくっている周囲の論者たちでもある、とそ

ういえなくもない。

4

ふたたび「手帳」の確認になるが、この「雨ニモマケズ」を中にして、これに前後するいくつかのメモに目を向けてみよう。

「疾すでに治するに近し／警むらくは／再び貴重の／健康を得ん日／苟も之を／不徳の思想／目前の快楽／つまらぬ見掛け／先づ——を求めて／以て——せん／という風の／自欺的なる行動／に寸毫も委するなく／厳に日課を定め／法を先とし／父母を次とし／近縁を三とし／農村を最後の目標として／只猛進せよ／利による友、快楽／を同じくする友尽く／之を遠離せよ」

これは「雨ニモマケズ」の一〇ページ前からはじまって、五ページ前でおわる計六ページにわたる手記である。10・29の日付によって、「雨ニモマケズ」より五日前のものであることがわかる。

小倉豊文氏が指摘するように、この前日の手記には「病苦必死のねがひ」という句が見え、「一進一退の照る日曇る日が、まざまざと感ぜられ」(7)はするものの、「農村を最後の目標として、只猛進せよ」とあるこの手記からは、少なくとも挫折感や敗北感のかけらも汲みとることはできない。

つぎのは日付けなしのものだが、「雨ニモマケズ」のあとにつけられた「南無妙法蓮華経」を中にした「十界曼荼羅」の中心部の書写に、ただちにつづく手記である。小倉氏の推定にしたがって、十一月四・五日の間に書かれたと思って間違いあるまい。

「◎凡ソ／栄誉ノアルトコロ／必ズ苦禍ノ／因アリト／知レ／◎天来ト疾苦トハ／猶陰陽ノ／電気ノ／如ク／或ヒハ夏冬ノ／二候ノ如シ／◎妄リニ天来ニ／身ヲ委スルモノハ／コレニ百スル／疾苦ノ後ヘニ／随フヲ知レ」

天来とは、天稟とか資質といった意で、ここでの疾苦とは、これも小倉氏の解説どおり、病苦だけをさすのではなく、ひろく苦しみとか難儀というほどの意であろう。

ややもすれば「天来ニ身ヲ委」せた自己の来しかたを、痛切に反省する賢治の冷えた心がここにはある。同手帳四ページ目から一〇ページ目につづく自戒のメモ中、「順次に増長して……」と増長慢をいましめ、さらに裏扉で「警貢高心」とくりかえし記して、おのが貢高心（慢心）をいましめた心境と、ここは照応する。賢治には、しかしあせりとのぞみが、「猶陰陽ノ如ク」走り交うのである。そしてあきらめが、その「後ヘニ随フ」。私はこの手記からは、賢治の覚めた心に注目しておきたい。また漢訳経文的な対偶表現と片仮名表記にも、ここで注意を留保しておきたい。

さて、この手記から「疾ミテ食攝ルニ難キトキノ文」のメモ一つおいて、つぎが本稿の標題にもした「土偶坊」と題する劇のメモである。これも小倉氏の指摘にあるように、「土偶坊」（デクノボウ）は「木偶坊」の賢治の誤記であるが……。

土偶坊

ワレワレハカウイフ

モノニナリタイ

第一景　薬トリ
第二景　母病ム　祖父母ナシ
腹膜
ナアニ腹膜ヅモノ
デクノ坊見タイナウーイ　小便ノ音
妻……ナアニクソ経ナドヅモノ……イヤ
アイテ　クヤシ　マタ
第三景　青年ラワラフ
土偶ノ坊石ヲ投ゲテ遁ゲル
第四景　老人死セントス
第五景　ヒデリ
第六景　ワラシヤドハラヘタガ――
第七景　雑誌記者　写真
第八景　恋スル人〈アラ幻滅　屁
第九景　青年を害セントス
第十一景　春
忘レダアダリマダ来ルテ
言フテドコサガ行タケ
第十景　帰依者
帰依の女

内容的な解説は小倉氏の剴切なそれ(『手帳研究』)を参照していただくことにして、ここには私見だけを述べたい。

賢治の劇の可能性には独異なものがあることは、周知のことである。別稿で取上げるのでここではくわしくいわないが、実際舞台にもかけた、現存する脚本は四篇(「飢餓陣営」、「ポランの広場」、「植物医師」、「種山ケ原の夜」)、はっきり劇のためのものとわかるメモ(劇のためのものかと思われるものも他にあるので)が、この「土偶坊」をふくめて十一(「喜劇　夜水引き」、「喜劇　大旱魃の最後の夜」、「古説三世因果物語」、「雑乱修法　暁」、「訊問」、「肥料設計」、「花巻銀行」、「黒溝台」、「象徴的ファンタジー　革命」、「禁治産」)ある。教師時代、劇団を組織して東京に乗込もうと意気どんだこともあるほどで、劇への意欲もなみなみならぬものがあった。――さて、私たちはこのメモと、主題において共通する「雨ニモマケズ」とを比較して、なにを感じるだろうか。いうまでもなく、これはフィクショナルな構想がメモされていて、いささかナンセンスな場面もあるにはしても(これは賢治の劇の通有性、ユーモア)、「雨ニモマケズ」の一種透明でシリアスな直線的ともいえる主観の流動が、ここでは空間化され、客観化されようとしているといえるだろう。「雨ニモマケズ」より、はるかに未完成なメモであっても、ある意味では、このほうがよほど健康な明るさを感じさせる。健康な遊びがある。

おそらくこれだけでは、まだ意味のつかみにくいこの劇のメモを、私は重視したい。テーマが同一であるだけに、さきに挙げたきびしい自戒の二つのメモ以上にも、「雨ニモマケズ」における賢治の心象の位相を、これは反照してくれると思うからである。

5

「◎快楽もほしがらず／名もほしがらず／いまはただ下賤の癈軀を／法華経に捧げ奉らん」（9－28日付）とあるように、東京で発病し、家族に遺書まで用意したのちの、「癈軀」病中の手記であるから、この手帳一巻を暗さがつらぬいているのは当然であろう。また、はげしかった、しかし今は賢治にはおぞましい、おのれの過去への悔恨がうずいていることも当然だろう。そしてまた、それらがただちに仏教への回心につながっていることも、当然であろう。

肉体のおとろえは、絶対的な、なにをおいても肉体そのものの挫折であり、敗北である。しかし、この手帳のしめす暗さや、ひややかさ、あるいは自己の客観的凝視という覚めた心象は、ただに暗い、虚無的な絶望とは、異質であることは瞭然である。そこに信仰の実質的なちからを見ることもできるであろう。あるいはまた、病状の、一進一退のなかにも、かすかに再起を望みうる進展があったからということもできるかもしれない。

焦慮と悔恨のはざまから、再起を望み、新生への祈りをこめたものとして、この手帳を、そして「雨ニモマケズ」や、これに前後するメモを読みとることもできるが、ここに祈りよりも、もっと意志的で、主体的な、悲壮なまでの決意のあることを読みとるのは、私だけであろうか。祈りをこえた前掲「農村を最後の日標として、只猛進せよ」というはげしいことばが、単に熱おとろえた日の気まぐれや、空元気だけで書けるであろうか。

この手帳を、なかんづく「雨ニモマケズ」を、賢治の人道的・宗教的な祈りの記録として見る傾向が、圧倒的に多いことは、前にふれたとおりである。彼の多面的な活動の中心に、やはり詩人の天稟を置く小倉豊文氏は「時として、あるいは人により、宗教信仰を主調音と考えられているようであるが、こうした見方は特にこの手帳の手記の表層的・部分的観察によるものではあるまいか」(8)と、あながちに宗教的に、この手帳が解釈されることをいましめている。

私はしかし、賢治の理想主義の極致を羅須地人協会の活動に見、これをいわば絶対化して、この手帳を賢治の挫折、敗北の所産と考える、たとえば中村氏の所説に代表されるような考えに対しても、やはり「この手帳の手記の表層的・部分的観察によるものではあるまいか」といいたい。

ここで、賢治の羅須地人協会活動をどうみるかについて、少しふれておく必要があるようだ。一般に研究者のあいだでさえ、羅須地人協会の活動は理想化されて考えられる傾向が強い。だが伝記的にも、賢治の、もっとも幸福だった教師生活から羅須地人協会活動への転機については、まだ充分に明らかにされてはいない。その機微はデリケートで、あいまいなままである。その転機とパセティックな活動を、彼の理想主義の極北として考えることは、いかにも賢治という文脈にきまりがつくので、つい誰しもその安易な誘惑に乗ってしまうのであるまいか、とさえ私には思われるのである。

私は賢治の無意識の領域をもふくめて、比喩的にではあるが、詩人賢治のなかに、一人の巨きな古代人の存在をみとめ、それが次第に孤独にめざめてくる（彼の文学活動を彼の自己発見の行為としてとらえ

るとき)、つまり古代から近代へ、神話から宗教へ、無意識から意識へ、没個性から個性へとメタモルフォーズしてゆく過程として彼の諸活動の、なかんづく詩的言語の、変移をみとめ、その延長線上に、この羅須地人協会の活動をおいて考えたことがある(9)。いまもその考えはかわらないが、つまり、羅須地人協会を中心とする実践活動も、その理論的綱要(プログラム)であった「農民芸術論綱要」も、自覚された孤独からの脱却と、ふたたび自然への復帰を、幸福な自然との合一を、めざしている賢治の強烈な意志のあらわれとして見たいのである。あるいは、彼のなかにめざめた近代と古代の乖離を、彼は労働によって、もっとも意志的な運動によって、うずめようとしたもの、と考える。

陽が照って鳥が啼き
あちこちの楢の林も
けむるとき
ぎちぎちと鳴る汚い掌を
おれはこれからもつことになる

そのころの心境をうたった「春」と題する有名なこの詩は、賢治の深淵をはらんでいる。昂揚する理想主義の高鳴りだけでは、けっしてない。そこには不安とおののきと、のっぴきならぬ肉親をふくめた周囲への論理の正当化と、純粋に内なるもののいざないと、あるいは破滅への賭けと、そして、いくらかの陶酔と、そして、そして……、それらがせめぎあって、ぎちぎちと鳴っている。「学校をやめて一月から東京へ出る筈だったのです。延びました。」とか、「学校をやめて今日で四日、木を伐ったり、木を植ゑたり病院の花壇をつくったりしてゐました。もう厭でもなんでも村で働かなければならなくなりました。」といった暗示的な森佐一宛の当時の書簡の文面などをここで持出すまでもあるまい。

「郷里では財ばつと云はれる」(書簡)家に育った、白い手の賢治ではあったが、羅須地人協会の成功を、最初から信じて疑わないような、もはやそんな甘い賢治ではなかったはずである。だからこそ、「殆んどあすこではじめからおしまひまで病気(こころもからだも)みたい」(協会時代をふりかえっての書簡)に、がむしゃらに突進せざるをえなかったのである。挫折や敗北は、最初から約束されているようなものであった。

彼が後日、高橋武治あての書簡で述懐するように、彼の生活の頂点は四年間の教師時代であった。(「私も農業校の四年間がいちばんやり甲斐のある時でした。但し終りのころわづかばかりの自分の才能に慢じてじつに虚傲な態度になってしまったこと悔いてももう及びません。しかもその頃はなほ私には生活の頂点でもあったのです。」)とすれば、羅須地人協会の時期は、もはやその下降期、生活的には敗北へのまっしぐらな退路であった、ともいえるわけである。

その当時は、そのことを意識するいとまもなかっただろう。そして過労のため肺浸潤に侵されて、最初の病床に横たわる昭和三年夏から彼の反省期がはじまると見るべきだろう。伝記的にはその後病状は回復して、例の東北砕石工場技師の時代があるわけだが、それがもとで、ふたたび昭和六年、すなわちこの手帳の時期に、病にた

おれたことによって、決定的な反省の決算をせまられたということができる。すなわち、初回の病臥から約三年間の反省期のしめくくりとして、この手帳を見ることができると思うのである。この極限の地点に立たされてみれば、これまでの反省もまだ甘かったという、二重の悔悟も、手帳に書きつける病床の賢治を、いら立たせたにちがいない。七行のみ残してあとは破棄されている別の手帳の、その七行は「病中記」執筆のメモで、その「病中記」執筆のアイデアは、この手帳、つまり「雨ニモマケズ」のしるされた手帳執筆中に生れたと、小倉氏は推定しているが(10)、この「病中記」こそ、もし執筆されていたとすれば、徹底した反省・悔悟と、深い決意・洞察との、決定的なバランス・シートとなっていただろう。

私はこの手帳ぜんたいから、なかんづく「雨ニモマケズ」に前後する手記の反照から、この〈作品〉、すなわち「雨ニモマケズ」を、もっとも均衡のとれた、もはや括弧なしの作品と呼んでもよい〈バランス・シート〉として見るものである。

それは「敗北」「過失」と見えるまでに、一見想像力のわかわかしい羽ばたきを忘れた、消極的な告白に見えるかもしれない。しかし、それは反省と決意との、悔悟と洞察との、つまり〈貸方〉と〈借方〉のバランスの安定からくる、相殺の結果ではあるまいか。——それならば、そのことを今一歩つっこんで、私は私の結論にむすびつけたい。

「雨ニモマケズ」を敗北の詩というなら、むしろ実生活における敗北こそが、このすぐれた詩を生み出している、イエスも孔子もプラトンも実生活の敗北者だったから賢者たりえ、聖者たりえたのだという、中村説を逆手にとった谷川氏の一種の逆説(11)は、それなりに正しい。それならば、敗北は最初からあったと見ることができるように、賢治における「土（木）偶坊」の思想も、彼の詩人としての出発当初から用意されていた、ということもできる。

「春と修羅」のはじめに出てくる、「屈折率」「くらかけ山の雪」「日輪と太市」の三作は、おなじ日につくられた、いわば彼の詩における処女作である。しかもこの「屈折率」と「くらかけ山の雪」の二作は、内面的にテーマが照応する。ともに孤独な賢治の生涯を先取りした感がある。前者は自分をアラヂンのランプとりに擬し、「陰気な郵便脚夫のやうに／急がなければならないのか」と自問し後者は「たよりになるのは／くらかけつづきの雪ばかり」にはじまり、「ほのかなのぞみを送るのは／くらかけ山の雪ばかりです」としめくくられる。

しかし、清冽な抒情のゆたかさによって、一見そうした孤独感は作者にも無意識かと思われるほどである。この孤独感は、賢治の全作品をつらぬく一つの原点といえるだろう。全作品ということは、ことに彼の場合、全生活ということである。そうしてその孤独が、あるいは無意識の、潜在する孤独が、いよいよ自覚され、顕在化されてくるのは、彼が教師をやめて、羅須地人協会の運動に飛びこんでいくころから、と考えてよいだろう。詩作活動でいうなら、ほぼ「春と修羅」第三集の時点から、ということになる。

それははじめから約束されていたといえる〈百姓生活—協会運動

―農民への献身〉による挫折感、敗北感、そして断念と、なおつあげてくる農民への愛と理想のアンビヴァランスを、彼は農民と肌でふれあう実践によって知ったのである。彼ははじめて社会を知り、そのことで自己という〈個性〉をいやというほど知らされる。かつて、彼にとって、〈社会〉は自然であった。そして自己も自然のなかに融解していた。そこにあの古代人さながらの幻想の実在もありえたし、爆発するような抒情の燃焼があった。それがかつての「くらかけの雪」が、十年後の手帳では「かすかにのぞみを託するものは／麻を着、けらをまとひ／汗にまみれた村人たちや／全く見知らぬ人」（日付なし）たちになるように、彼にとっての社会は、もはや自然ではなく、まさに人間たちの社会、農民たちの社会になってくるのである。山河宇宙への抒情は、人間社会への劇へと変貌してくる。それは孤独を自覚した近代人の、まさに悲劇であるのかもしれない。そのことはなによりも彼の詩と言語の質が証明している。

悲劇を知って、しかし彼は孤独と虚無に沈潜する人間ではない。そこに「土（木）偶坊」としての生きかたの確認がおこなわれることになる。孤独が無自覚にせよ、原点として彼に存在したということは、すなわち「土（木）偶坊」も無自覚的に、つねに彼に存在する原点的思想であった、といえるだろう。

彼の手帳は、そして「雨ニモマケズ」は、この原点の、なによりもたしかな確認といえないであろうか。そして彼はその確認を、かつての万華鏡的な想像力の奔騰によってでなしに、いいかえれば神話的言（パロール）によってではなしに、覚めた近代人の個性的言語（ラング）によって、おこなっていると――。そして、このこともまた、この〈作品〉を一見弱く、想像力の羽ばたきをやめた詩であるかのように見せているのである。

（末完）

（付記――枚数の都合で、ぜひふれておかねばならない幾つかの問題を、ここで割愛することを残念に思う。ことに本文中、後に取上げることを約した賢治におけるカタカナ表現の必然性などは、文体論的な考察を要する好箇の課題なのだが、追ってそれらを加えて完稿としたい。）

〔註〕

1、小倉豊文『宮沢賢治の手帳研究』創元社、一三二ページ。
2、中村稔『定本・宮沢賢治』七曜社、V、2「雨ニモマケズ」について。
3、「国文学」昭41・4月号、拙稿「最近における宮沢賢治研究の展望」参照。
4、朝日新聞、昭38、2、15夕刊。
5、詩誌「時間」二〇四号「小石を置く」13、宮沢賢治論
6、前註小倉『手帳の研究』一三三ページ。
7、同前書、一一八ページ。
8、小倉氏『宮沢賢治「手帳」解説』二三、二四ページ。
9、拙著『文体序説』、VI方法の実例―宮沢賢治の作品活動―参照。
10、前説小倉『解説』書、一四ページ。
11、谷川『宮沢賢治の世界』二五九ページ。